

「〇〇ケア」とか「ケア△△」ということだが、日常のさまざまな場面に溢^{あふ}れている。ヘアケアやスキンケアを謳^{うた}った美容商品。健康ブームに乗って人気を高めているヘルスケア。福祉や看護の現場で耳にするデイケアやケアワーカー。ケアというこ
とばを、わたしたちはごく普通に用いているが、そもそも「ケア」とはなんであろうか。

英語の「ケア (care)」は、悲嘆や病床を意味する古英語やゴート語の *carē* に由来する。この語に前置詞の *for* が付け加わることで、何かしたいと気持ち (配慮) を意味するようになり、一四世紀になると保護の意味で用いられるようになった。欧米の思想や人間観のなかで、他者への深い思いやりや道徳的な関係を築く、倫理としてのケアが発展してきた。そして今日では、ケアは「caring for (世話する)」と「caring about (配慮する)」の意味が重なったコンテクストで用いられている。「世話」に注目すれば身体的・物理的な側面を、「配慮」に焦点を当てれば精神的側面を強調することになる。そうしたなかで「自己」へのケア」という用例まで登場してきたのだ。

他方、日本において「ケア」というカタカナことはが使われはじめたのは最近になってからだ。日本語にはもともと、育児 (子どものケア)、介護 (高齢者のケア)、介助 (障害者のケア)、看護 (傷病人のケア) といった用語がある。それらが総して「ケア」とよばれるようになった背景には、九〇年代以降の日本における介護福祉の導入がある。それは、日本における核家族

生き方を問う

人間学の キーワード

ケア Care

とだ みかこ 民博 機関研究員
戸田美佳子

化と経済成長を背景に、ケアが労働として市場で調達・選択されるようになり、社会化されていった過程といえる。「ケアの社会化」によって、身内でない人に、自分の、あるいは身内のケアを委ねることが可能になってきた。日本において「ケア」という新しい用語の登場は、これまで家庭といった私的な領域で担われていたために、社会のなかで存在しなかった問いを浮び上がらせ、それまで誰もが「問題」と思わなかったものを社会問題化する効果をもっていた。そうした意味では、ケアは人間愛にもとづき自然に発生する現象というよりは、歴史的な構築物だといえる。さらには、ケアにはつねに倫理的な負荷がかかり、無条件に「よきもの」とみなされてきた傾向があると、社会学者の上野千鶴子^{ちづこ}は指摘する。ケアがじつは、「できれば避けたいやつかいな重荷」であるにもかかわらず、ケアということばにはそれを「解毒」する作用があるという。

超高齢社会を迎えた日本は、誰もが他者と支えあわなければならぬ。「ケア社会」へと突入した。ケアは今や社会問題だ。ケアの現場には受け手と担い手とのあいだに立場の入れ変わりが難しい、非対称な関係も内在する。このようなデリケートな側面があるため、その議論にはしばしばある種の息苦しさともなったままだ。こうした状況に風穴を開け、ケアされるものとケアするものが双方向的な関係を築くにはどうしたらいいのか。「ケア」とは何かを語ることは、とりもなおさず、これからのわたしたちの生き方を問うことでもあるのだ。